地 域 間 交 流 推 進 校

【小学校・地域間交流に関わる体験活動】

三川町との地域間交流体験活動

神奈川県横浜市立浦島小学校

学　校　の　概　要

① 学校の規模

○ 学級数：１７学級

○ 児童数：４７４人

○ 教職員数：２９人

○ 活動の対象学年：６年生

② 体験活動の視点などからみた学校環境

○ 横浜市の中心であるＪＲ横浜駅より一駅の東神奈川駅より約500ｍの距離にあり、ベイブリッジやランドマークタワーなど、みなとみらい地区を望む高台に位置している。

○ 浦島太郎の伝説発祥の地であり、カメリンピック、たまてばこ発表会、タートルズコンサート、竜宮杯ドッジボール大会など浦島伝説につながる名称がつけられている。

○ 人との豊かなつながりの中で、自分の思いを表現することを重点として設定し体験を重視した教育活動やふれあい活動を通して思いやりの心をもち、自分の意志で行動し、良さを見つけ伸ばしながら、広く地域社会との関わりをもつ子に育てていきたいと考えている。

③ 連絡先

○ 〒２２１－００６２
神奈川県横浜市神奈川区浦島丘１６

○ 電　話：０４５－４０１－４４３７

○ ＦＡＸ：０４５－４３１－０２９１

○ ホームページ
http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/urashima/

○ 電子メール
ｌ３ urasim @ edu.city.yokohama.jp

体　験　活　動　の　概　要

① 活動のねらい

○ 日常の学校や家庭から離れ、豊かな自然や文化、人にふれる体験を通し、学校における学習活動などの発展・充実を図る。

○ 山形の生活や文化の理解を深めるとともに、自ら課題を設定し、目的意識をもって活動することができる。

② 活動内容と教育課程上の位置付け
（単位時間数・日数）

［５年生］

○ 田植えと収穫祭にかかわる活動
（社会科１単位時間、総合的な学習の時間７単位時間）

［６年生］

○ オリエンテーション
（総合的な学習の時間２単位時間）

○ 見学グループによる調査活動
（総合的な学習の時間４単位時間）

○ 現地小学校との交流活動
（総合的な学習の時間４単位時間）

○ 資料作成活動
（総合的な学習の時間３単位時間、国語５単位時間）

○ 校内での交流活動
（ 総合的な学習の時間１単位時間）

○ 現地での交流活動２泊３日
（総合的な学習の時間１２単位時間、特別活動６単位時間）

○ 情報伝達活動
（総合的な学習の時間３単位時間）

○ 収穫祭にかかわる活動
（総合的な学習の時間６単位時間）

1　活動に関する学校の全体計画

（1）活動のねらい

○　学校や家庭を離れた体験活動を通して、互いのよさを認め合い、友だちとの心の結びつきを一層深める。

○　山形の自然・文化・人々とふれあい、そこでの体験を通して農業に携わる人々の努力や工夫を知る。

○　自主的・自立的な集団生活の態度を養う。

（2）全体の指導計画

ア　活動の名称：山形宿泊体験学習

イ　実施学年：第６学年（７１名）

ウ　活動内容

４月～５月	○オリエンテーション（総合的な学習の時間）
５月上旬	○見学グループによる調査活動（総合的な学習の時間）
５月中旬	○現地小学校との交流活動（総合的な学習の時間） ・交流の内容についての話合い ・手紙や電子メール交換
５月～６月	○資料作成活動（総合的な学習の時間＋国語） ・体験学習のしおり作成 ・三川町ガイドブック作成（事前）
６月３日	○校内での交流活動（ 総合的な学習の時間） ・三川町実行委員来校 ５年生の田植え指導、６年生との最終打ち合わせ
６月８～１０日	○現地での交流活動２泊３日（総合的な学習の時間＋特別活動） ・現地小学校との交流活動　・うどんうちやおにぎりづくり体験 ・三川町民との交流　・田植え体験や農業体験（見学）
６月中旬	○情報伝達活動（総合的な学習の時間） ・三川町ガイドブック作成（事後）
１０月３０日	○収穫祭にかかる活動（総合的な学習の時間） ・餅つき体験　・わら細工体験　・もみすり体験

2　活動の実際

（1）事前指導

○　山形体験学習実行委員会の活動

三川町での交流活動について、実行委員が中心となって計画を立てた。計画に基づいて体験学習のしおりを作成した。

○　三川町の実行委員との交流

事前に三川町の実行委員の方々に来校いただき、体験学習についてのオリエンテーションを行った。

○　継続した調べ学習として、三川町ガイドブック作りに取りかかった。

（２）活動の展開

○　山形体験学習（６月８日・９日・１０日）

・押切小学校との交流

押切小学校の紹介に始まり、押切小学校の特色ある教育活動である一輪車を取り入れた交流を行った。

自己紹介を兼ねて名刺交換を行った。。

現在も文通や電子メールを通しての交流が続いている。

・うどん打ちの体験

三川町町長、ＪＡ代表による歓迎会

庄内農業高校の高校生

ＪＡ女性部

農業協同組合

町役場の方々との交流

・三川町の公営の施設（田田（でんでん））での町の人々との交流

・田植え体験

子どもたちのために田植えの日に合わせて、餅米の苗を育ててくれている。

泥の中に入るまでは抵抗はあった児童もいたが、温かな泥の感触を楽しみ、熱中して田植えを行った。

・選択コースの体験活動

ｶﾝﾄﾘｰｴﾚﾍﾞｰﾀｰｺｰｽ

最新農法コース

動物コース

○　収穫祭（１０月３０日）

わら細工体験

もみすり体験

もちつき体験

（３）事後指導

事後指導では、地域間交流体験活動の取組内容などについて三川町ガイドブックにまとめ、たまてばこ発表会（学習発表会）を通して、下学年の児童の学習につなげていくようにした。

また三川町へのお礼の手紙やメール交換、台風の被害に対する寄せ書きなど継続した交流を行っている。保護者に対しても交流の様子を紹介し、活動への理解を深めるようにした。

３　体験活動の実施体制

（１）学校支援委員会の体制

三川町農業体験学習会、ＪＡ庄内たがわ三川町支所青年部が中心となり、三川町役場、三川町教育委員会の方々が加わり、実行委員会が組織されている。年度当初より実行委員と年間を通して４回の会合や交流の場を設定して、計画立案と活動を行っている。また電子メールやＦＡＸなどの情報機器を利用し、詳細についての打ち合わせや確認作業を行っている。

実行委員が中心となって、農家の方々や庄内農業高校生が、教育ボランティアとして地域間交流活動を支えてくださっている。

（２）地域間交流プログラム開発委員会との連携

１０月２８日に地域間交流プログラム開発委員会に出席し、本年度の取組内容を報告し指導・助言を受けた。また、１０月３０日の収穫祭では、地域間交流プログラム開発委員会の視察を受けた。

（３）配慮事項等

宿泊施設をはじめ、施設面（衛生面・安全面）、医療機関などすべてにわたり、三川町実行委員の方々が事前に確認し配慮された上で、連絡をいただている。

収穫祭では食物アレルギー、衛生面や安全面での配慮が必要ながらも、保護者の支援や協力を最小限に留め、児童の自主性を重視していくようにしている。

４　体験活動の評価の工夫を指導の改善

○　育てていきたい力をより明確なものとし、児童の実態に合わせて改善を重ねている。

○　スモールステップでの自己評価を行い、次の活動がさらに深まるように指導している。

５　体験活動の成果と課題

山形宿泊体験学習に向けて事前に子どもたちは、「一期一会」を合い言葉に決定して計画を立てていった。押切小学校との交流や三川町での様々な活動、農業見学の分担や役割などを積極的に行われた。

いろいろな出会いを大切にしたいという子どもたちの思いは、三川町の方々との出会いやふれあいの中で大切にされていった。「山形の人たちって温かくて、自分たちのことを歓迎してくれたんだ。」とか「ぼくたちが来るために前から準備してくれていたんだね。」「三川町の人たちって優しい顔をしているよ。」「農業の話をする時には、とっても嬉しそうな顔をしているんだ。夢があるんだと感じた。」などの子どもたちの感想が多数あった。

これら三川町の風土やその地に生きる人々の強く温かな思いを感じ取ったことは、これからの自分たちの生活や生き方に反映されていくだろう。

三川町の小学生との交流は、宿泊体験学習の時の一回に留まっている。手紙などのやりとりや現地に行っての地域の方々との交流はあるが、小学生同士の継続的な交流は深められていない。子どもたちは、自分たちが三川町の小学生を招いて交流を深めたいという願いをもっている。今後は子どもたちの願いをどう実現していくか、交流の幅をどう広げていくことができるかが課題の一つである。解決の手だてとして、学校間交流、地域交流の継続に向けて、電子メール等による情報交換が考えられる。今後も互いに情報を発信、交換しながら交流をつなげていきたい。

また、田植えの体験後は収穫までの作業を、三川町の方々に任せた状態となっている。働く意義や成就感、達成感を味わわせていくために 実際の農作業にかかる手間や苦労なども体験させながら活動の幅を広げていきたい。

【小学校・地域間交流に関わる体験活動】

学ぶ楽しさを味わう交流体験活動の創造

～　異なる環境における豊かな体験活動の促進　～

鹿児島県鹿児島市立西田小学校（かごしま　にしだ）

学　校　の　概　要

①学校規模

○　学 級 数：　１６学級
○　児 童 数：　４６２人
○　教職員数：　３１人
○　活動の対象学年：５年生（７０人）
　　６年生（９１人）

②体験活動の観点などから見た学校環境

○　校区は鹿児島市の中心部にあり，甲突川と武岡，常盤の森の間に位置し，九州新幹線が開通した鹿児島中央駅も近く住宅街として発展を続けている。
○　住宅街に位置する学校ながら，７３０平方メートルの農園を所有していることを生かし，農作物の栽培に取り組んできている。

③連絡先

○　〒890-0042
　鹿児島県鹿児島市薬師２丁目31番１号
○　電　話　　099-253-9151
○　ＦＡＸ　　099-253-9152
○　ホームページ
　http://www.keinet.com/nishidas
○　電子メール
　nishidas@keinet.com

活　動　の　概　要

①活動のねらい

○　農作物の栽培体験活動を通して，身近な自然や社会・地域と関わり，自ら課題を見つけ主体的・創造的に問題を解決することができる。
○　心の底から伝えたくなるような出会いや環境との関わりを通して，表現する楽しさを味わわせ，子どもたちの「伝え合う力」の育成を図る。
○　地域と交わり，地域で学ぶ学習を通して自然の不思議さや，素晴らしさを感じ取らせ，子どもたちに「ふるさと意識」をつくっていきたい。

②活動内容と教育課程上の位置付け

（単位時間・日数）

○　市来町での農業体験活動（５年生）
　　…12時間・２日
（総合的な学習の時間･･･全６５時間）

○　高田村つくり委員会や高田小学校との農業体験と交流学習（６年生）
　　…６時間・１日）
（総合的な学習の時間･･･全６５時間）

1　活動に関する学校の全体計画

○　活動のねらい

(1) 体験的活動を重視した「総合的な学習の時間」…（食と農に関する教育）

農作物栽培を通して，身近な食に関することに興味・関心を広げ，農作物生産の喜びや苦労を味わい，農業生産に関わる地域や学校との交流を通して，食糧の自給問題・自然や環境の問題に気付き，主体的・創造的に問題を解決し，自らの生活について考え，より豊かに生きていく力を育むことをねらいとしている。

(2) 今年度の地域間交流学習のねらい

【５年生】

① 市来町でポンカンの有機栽培に取り組む橋口農園でのぼかし肥作りや,収穫体験を通して,有機農業に取り組む人々の思いや願いを学び，自らの生産活動に生かし，食の安全性や環境問題など自分たちの食生活について考えるきっかけとする。

【６年生】

② 川辺町の高田村づくり委員会との農業体験交流（酪農体験・冬野菜の植え付け・さつまいもの収穫）を通して，生産農家の知恵や思いを学び，日本の食糧生産について考えるきっかけとする。

③ 高田小学校での大豆の収穫体験を通して，大豆栽培に関する情報を交換し，コミュニケーション能力の育成を図る。

④ 異なる環境にある地域を学ぶ活動を通して，自分たちの住む地域を見つめ，郷土の理解を深める。

○ 全体の指導計画

(1) 活動の名称　　フェニックスタイム…「総合的な学習の時間」の名称

(2) 実施学年　　５年生「めざせ有機農業」　　６年生「一粒の大豆から」

５年生「めざせ有機農業」	６年生「一粒の大豆から」
(3) 活動内容 有機農業に取り組み，自分たちで土作りや育て方を調べ，試行錯誤しながら野菜を作る活動を通して苦労や喜びを味わうとともに，課題や問題に気付き，意欲的に追究し，学んだことを相手を意識しながら表現する。 さらに，食の安全性や環境の問題など自分たちの身近な食生活について考える学習活動を展開する。	**(3) 活動内容** 日本食に欠かすことのできない大豆を育て，加工する活動を通して，自分の思いや願いに応じて必要な情報を収集・選択し，伝える相手を意識しながらまとめ，表現する。 さらに，日本の食文化の知恵，食糧問題等にまで視野を広げ，今後の自分の食生活を見直し，大切にしていこうとする学習活動を展開する。
(4) 教育課程上の位置付け 地域間交流学習…12時間（２日） 「総合的な学習の時間」…６０時間	**(4) 教育課程上の位置付け** 地域間交流学習…６時間（１日） 「総合的な学習の時間」…６０時間
(5) 期間 ７月…農業体験（ぼかし肥作り・有機野菜の見分け方・農園の見学） 12月…農業体験（ポンカンの収穫・有機米のおにぎり作り・新農園の石ころ拾い）	**(5) 期間** 11月…農業体験（酪農体験・冬野菜の植え付け・さつまいもの収穫） 11月…高田小学校との交流（大豆の収穫）

２ 活動の実際

(1) ５年生での事例

①事前指導

有機栽培や一般的に行われている栽培方法について調べると同時に,自分たちの農園では,どのような方法で野菜を栽培するのか話し合った。一般的に行われている栽培方法と有機栽培について長所と短所を比較しながら話し合ったが結論はでなかった。そのため，子どもたちにとって馴染みの薄い有機栽培の生産農家に話を聞き，自分たちの栽培方法を決定することを提案し，今回の交流学習を計画した。

②活動の展開

ア　活動場所…市来町内の農園

イ　活動の実際　　７月14日（水）

１　有機野菜と有機栽培の話　　２　ぼかし肥つくり　　３　農園の見学

③事後指導

地域間交流学習後，子どもたちは，集めた情報を基に自分たちの力だけで大根を栽培している。栽培しながら播種の仕方や病害虫の予防などの課題にぶつかり，農家の方からのアドバイスを求める声が聞こえるようになってきた。また，今年は，ポンカンを栽培する橋口さんが，これまでになく台風の災害を受けたたことを知り，子どもたちは再度訪問して農園の様子を知りたいという思いも高まり，２回目の交流学習を12月20日に実施することになった。

(2) ６年生での事例

①事前指導

西田小学校とは環境の異なる農村地域で育てられた大豆と自分たちで栽培した大豆とを比較しながら体験学習を進めることにした。また，昨年度の交流学習の反省から大豆の収穫や脱穀の体験だけではなく，他の農業体験を活動に組み込むことで，農業に対する関心や体験活動への意欲を喚起するのではないかと考え，今回の交流学習を計画した。

②活動の展開

ア　活動場所…川辺町高田　（高田小学校）

イ　指 導 者…高田村づくり委員会，高田小職員，高田小児童（４～６年生）

ウ　活動の実際　　11月17日（水）

１　大豆の収穫　　２　冬野菜の植え付け　　３　さつまいもの収穫

③事後指導

地域間交流学習後，高田小の子どもたちと交流しながら学んだ方法を生かしながら，学校農園の大豆を収穫した。作業を進めながら大豆の生育状況など違いに気付き，何が違うのか新たな課題を見つけることができた。

(3) その他の交流活動　６年生

修学旅行…　熊本市内の史跡や施設を自主学習という形で見学する。その際，熊本コンベンションセンターに協力を依頼し，ボランティアガイド10人の方々とともに楽しく交流しながら学習することができた。

３　体験活動の実施体制

(1) 学校支援委員会の体制

今年度は，学校支援委員会に「総合的な学習の時間」における「食と農に関する教育」の更なる推進を図っていくために，継続交流ができる受け入れ地域の選定についても協力を求めた。また，全教育活動の中から社会体験・自然体験・奉仕体験など様々な体験活動について見直し，より豊かな体験活動とするための指導助言を受けた。

【学校支援委員会のメンバー】・県農業改良普及センター・有機農業生産組合・鹿児島農政事務所・校区公民館運営審議会会長・ＰＴＡ副会長・漆間種苗

(2) 配慮事項

①　交流学習中の安全を配慮し，一日保険を利用した。

②　現地での安全を確保するために，交流先近くの病院等を調べ緊急用の連絡網を作成した。

③　交流先で打ち合わせを行い，子どもたちに交流先と相互情報交換をすることで学習への意欲高めた。

４　体験活動の評価の工夫と指導の改善

(1) 評価の工夫

①　子どもたちが，体験ごとに活動を振り返り，作文に表しファイルしていく。

②　学習活動の内容を振り返り「今日の学び」は何だったのかを明確にし，次の活動への見通しを持たせる。

③　ウェビング法を課題発見の手立てだけでなく，これまでの学びを関連付けることで，個人の学びを評価することに用いる。

(2) 指導の改善

①　体験活動が子どもたちの必要感に基づくものとなるように指導計画を工夫する。

②　子どもたちの活動に柔軟に対応できるように指導計画にゆとりを持たせる。

５　体験活動の成果と課題

(1) 成果

①　心の底から伝えたくなるような感動体験が，子どもたちの課題追究の原動力となったり，他教科の学習内容（作文や図画工作の作品）にも生かされたりした。

②　交流学習を通して，友達と協力して活動を進めることで友達や自分のよさに気付き，人との関わりを多く経験することで感謝の心を育むことができた。

③　交流地域で打ち合わせを行うことで，人々の思いを肌で感じ教師自身の研修となった。

(2) 課題

①　体験活動を通した子どもたちの変容等に関わる評価をより明確なものとできるよう工夫する必要がある。

②　子どもたちの体験を他教科でも生かせるように指導計画の見直しを図る。

③　今後も継続可能で有意義な体験活動となるように関係機関との連携を深める。

【中学校・地域間交流に関わる体験活動】

都市部におけるふるさとＰＲ体験活動

岩手県東和町立東和中学校

学校の概要

①　学校規模

○ 学級数：１０学級（内特殊学級１学級）

○ 生徒数：２７９人

○ 教職員数：２９人

○ 活動の対象学年：三年生・１０４人

②　体験活動の観点から見た学校環境

○ 東和町は北上山地の丘陵に囲まれた田園の町である。人口約１万１千人。ＪＲ釜石線と国道２８３号線が横断。最近東和インターが開通した。インターのすぐ隣に東和温泉がある。

○ 成島の毘沙門天立像、縄文遺跡群、舘山公園（土沢城址）、本校に隣接する萬鉄五郎記念美術館等が歴史と文化の町を形作っている。

○ 郷土芸能への取り組みをはじめ、さき織体験、和紙づくり体験、無人駅の美化ボランティア体験等にも取り組んでいる。

○ 学校は高台に位置している。春は隣接する舘山公園から鶯の声、夏は蝉時雨、秋は赤トンボの群れと虫の音等、季節感を感じ取れる環境にある。

③　連絡先

○ 〒０２８－０１１４
岩手県和賀郡東和町土沢５区２０番地

○ 電　話：０１９８－４２－４２２１

○ Ｆａｘ：０１９８－４２－４２２２

○ 電子メール
towachuu@michinoku.ne.jp

体験活動の概要

①　活動のねらい

○ 都市部での体験活動を組み立て、豊かな人間性や社会性を育む。

○ コミュニケーション能力を高める。

○ 人前で臆せず発表できる力を養う。

○ 体験活動を通し、気づいて適切に動ける力を高める。

②　活動内容と教育課程上の位置づけ

○ 総合的な学習（３０時間）及び学校行事（１０時間）で実施。

○ ふるさと村で舞う「立石百姓踊り」の練習

○ 事前ＰＲポスターの作成

○ 自分たちの町の調査に基づく観光スポットチラシ、町についてのアンケートの作成

○ お礼のおみやげ作り（ハーブ石鹸・木工キーホルダー）

○ 学校紹介ビデオの作成

○ 東和ふるさと村でのＰＲ活動（立石百姓踊りの披露・もちつき・おにぎり作り）

○ チラシ配布、アンケート調査の実施

○ 神奈川県川崎市立東高津中学校との交流（自己紹介カードを活用してのゲーム交流・学校紹介ビデオの活用）

○ 文化祭での取り組み内容の発表

1　活動に関する学校の全体計画

（1）活動のねらい

ア　異なる環境における豊かな体験活動という視点から、農村部で生活している生徒が都市部での体験活動を行なうことを通し、豊かな人間性や社会性を育む。

イ　地域の方から指導いただく場面や、製作活動に取り組む場面を設定し実践することを通し学ぶ姿勢、お互いに支えあう姿勢を高める。

ウ　活動に関わる人と人との関係を通し、コミュニケーション能力を高める。

エ　ふるさと村での発表披露、アンケート依頼等の活動を通し、人前で臆することなく、堂々と発表できる力を養う。

オ　体験活動に取り組むなかで、気づいて適切に動ける力を高める。

（2）全体の指導計画

ア　活動の名称

「ふるさとＰＲ体験活動」

イ　実施学年

第３学年

ウ　活動内容

・　地域のもつ特色についての調査研究
・　学校紹介ビデオの作成、お礼のおみやげ作り
・　立石百姓踊りの習得
・　東和ふるさと村でのＰＲ活動
・　神奈川県川崎市立東高津中学校との交流

エ　教育課程上の位置づけ

・　事前事後の学習は総合的な学習の時間で実施。当日部分は学校行事として実施。

オ　実施期間

４・５月及び９・１０月。総合的な学習の時間（３０時間）学校行事（１０時間)。そのほか昼休み、放課後等の時間に郷土芸能の練習に取り組んだ。

2　活動の実際

（1）事前指導

ア　神奈川県川崎市での体験活動の組み立て

東和町と神奈川県川崎市とは昭和６３年からリンゴの産直活動を通してさまざまな交流がある。川崎市の小学生が来町してのサマーキャンプ、川崎市東高津中学校二年生による本町での農家生活体験学習なども行なっている。

また、本校三年生が修学旅行時に川崎市にあるアンテナショップ「東和ふるさと村」を会場として、東和町を都会の人々にアピールする体験活動、東和町についてのインタビューをする体験活動等を通し、活動のねらいにせまるよう組み立てた。

また、これまで来町しての交流のあった川崎市立東高津中学校を訪問し、双方向の交流になるよう進めることとした。

イ　東和ふるさと村（産直センター）のイメージつくり及び体験活動の企画

ふるさと村元村長の町役場農村振興課課長さんから、東和ふるさと村の活動について詳しく説明していただきイメージをもたせることからスタートした。

（２）活動の展開

ア　アンテナショップでの活動及びその周辺での活動に向けての取り組み

川崎市にある「東和ふるさと村」の場で東和町をアピールするため、郷土芸能「立石百姓踊り」を披露することを企画。

総合的な学習の時間に地元の方から指導いただいた。それ以外にも、休み時間、放課後等に練習を積み重ね、踊りの習得に励み、当日披露した。

「立石百姓踊り」の披露

イ　事前ＰＲポスター作り・東和町観光スポットチラシ作り・東和についてのアンケート作り

・　修学旅行時にふるさと村で郷土芸能披露等のイベントを行なう旨のポスター（大２枚）を作成。ふるさと村に事前に届けて掲示していただいた。

ウ　チラシ配布・アンケート調査

・　「まほろばの里東和」のＰＲに役立てるため、町内の観光スポットを調べ、東和町観光スポット紹介チラシを作成した。

修学旅行当日、新丸子駅と元住吉駅、武蔵小杉駅にそれぞれグループに分かれて、東和町観光スポット紹介チラシを配布するとともにアンケート調査を行なった。修学旅行団としての取り組みであることが分かるように、東和中学校の幟旗（学校名と校訓「真理を求め友愛に生きる」が示されている）を使って行なった。

最初は呼びかけの声も小さかったが、なれるにしたがい、進んで声かけができるようになった。ただしアンケート自体を拒否される場合も多く「都会の人は冷たい。自分も将来都会に住んだらこうなるのかと思うと悲しくなる。」という印象を持った生徒も少なからずいた。

エ　お礼のおみやげ作り（アンケートにこたえてくれた人へ）

・　「ハーブ入り手作り石鹸」作製

・　「木工キーホルダー」作製

オ　餅つき・おにぎり作り

・　ふるさと村の職員の指導をいただきながら、当日、杵と臼を使って昔ながらの餅つきを行なった。きな粉をまぶし、きな粉餅を作り、お客さんにふるまった。東和米を使っておにぎりも作り東和の味を味わっていただいた。

飛び入り参加もあった餅つき

カ　東高津中学校との交流

・　今まで東高津中との交流は、農家生活体験学習で来町した時のみ。今回はじめて修学旅行時に訪問し双方向の交流となった。自己紹介カードを活用してのゲーム交流、応援団からのエール、学校紹介ビデオでの相互理解。

（３）事後指導

体験活動に関わる個人新聞を作成し、生徒たち自身の体験のふりかえり活動を行なうなかで、学んだこと、気づいたことを確認した。

あわせてテーマにそってグループごとにまとめ、文化祭での発表につなげた。

東和町と都会を比較するなかで、人々のくらしや住環境の違いなど、ふるさと東和のもつよさについて考えさせた。

3　体験活動の実施体制

○　学校支援委員会の体制

町内各学区で教育振興運動に取り組まれている方や民生委員等をメンバーとし、体験活動の組み立てについて意見交流し体験活動の充実につなげた。

町教育委員会を通し川崎市にある東和ふるさと村と連携するなかで、活動内容の充実を期した。

○　配慮事項等

・　都会地でのグループ別自主行動については、グループ代表に携帯電話をもたせ、安全面、健康面で連絡をとりあいながら実施した。

・　移動に際しては、ルート、電車賃、所用時間等について、一人でも動けるように事前に調べ確認した。また、安全への配慮を要する場面、箇所をチェックし実施に備えた。

4　体験活動の評価の工夫と指導の改善

・　一人一人の役割分担に基づく取り組み状況を自己評価するとともに、個人新聞の作成、グループごとのまとめを行ない相互評価につなげた。

・　困難点もふくめ、見通しをもたせながら、どの生徒も自分の役割を達成し成就感を感じとれるよう、取り組み過程における声がけに配慮した。

5　活動の成果と課題

（１）成果

○　修学旅行時の神奈川県川崎市での体験学習のテーマは、「外から見た東和のよさを知ろう」であった。

修学旅行へ行く前の取り組み、当日の取り組み、事後の取り組み（まとめ）など多くの体験を積み重ねたが、それぞれ努力と工夫と根気がいるものであり、相互に協力しあおう、支えあおうとする心の姿勢づくりにつながった。

○　田園の町､東和の子供たちが､都会地でふるさとＰＲの体験活動を行なうことを通し、人と人とのコミュニケーションの大切さを感じ取るとともに、人前で臆せず表現しようとする力、気づいて適切に動こうとする姿勢が培われた。

○　自然や人情豊かなふるさと東和町のもつよさを再認識できたことは大きな収穫であった。

（２）課題

○　異なる環境のもとでの体験活動を進める上では、当該地域との綿密な連絡調整が必要になってくる。早期からの準備を進めていきたい。

○　交流で学びえたものを、日常の生活場面に活かす取り組みを進めていきたい。

○　どういう力を育むためにどういう活動を組み立てるか、という原点に立ち、実施した活動内容を検討し改善につなげていきたい。

【小，中学校・地域間交流に関わる体験活動】

ふるさと再発見　～継続的学校間交流をベースにして～

山口県防府市立野島（ほうふ　のしま）小・中学校

学　校　の　概　要

① 学校規模

（小学校）

○ 学級数：２学級（１・３年複式）

○ 児童数：５人

○ 教職員数：４人

○ 活動の対象学年：全学年・５人

（中学校）

○ 学級数：１学級（２・３年複式）

○ 生徒数：５人

○ 教職員数：４人

○ 活動の対象学年：全学年・５人

② 体験活動の観点などからみた学校環境

○ 本校は野島本島を校区としている。

野島は防府市三田尻港の南東 15km の海上に位置し，瀬戸内海国立公園の一角を占める自然環境豊かな島である。

○ 島の周囲は格好の漁場で，海産物に恵まれ，島の産業の中心も漁業である。

○ 昔から地域と学校が一体となった行事が多く，地域の伝統文化活動に参加したり，授業で地域の人材を活用したりするなど，地域と学校が密接に関わり合っている。

○ 以前から山間部の学校や都市部の大規模校と交流を行っている。

③ 連絡先

○ 〒７４７－０８３２

山口県防府市大字野島１５８番地の１

○ 電　話：０８３５－３４－１４００

○ ＦＡＸ：０８３５－３４－１４１４

○ http://www12.ocn.ne.jp/~noshima/

○ noshima1@orange.ocn.ne.jp

体　験　活　動　の　概　要

① 活動のねらい

○ 離島野島の豊かな自然に親しみ，自然の中で活動することを通して，ふるさとのよさを実感し，豊かに生きていく知恵やふるさとを愛する心を育てる。

○ 異なる環境や集団での協働生活において，自己を表現する活動や他者を理解する経験を通して，自己を確立したり，他者を思いやる豊かな人間性を育てる。

② 活動内容と教育課程上の位置付け

○ 海の体験活動

・ 船からの一本釣り大会
（総合的な学習の時間６単位時間）

・ 無人島探検
（総合的な学習の時間２単位時間）

・ 伝馬船漕ぎ
（総合的な学習の時間２単位時間）

・ 底引き漁体験
（総合的な学習の時間２単位時間）

・ ひらめの稚魚放流
（総合的な学習の時間２単位時間）

○ 交流体験活動

・ 山間部の柚野中学校との交流
（総合的な学習の時間６単位時間）

・ 山間部の東厚小学校との交流
（学校行事　６単位時間）

○ 宿泊体験活動

・ 徳地少年自然の家での自然宿泊
（１泊２日：総合的な学習の時間６単位時間，特別活動６単位時間）

1　活動に関する学校の全体計画

（1）活動のねらい

本校では，以前から，地域の特性を生かして海に囲まれた豊かな自然を活用した「海に関わる体験活動」を教育課程に位置づけて実施している。また，環境の異なる都市部の大規模校や山間部の学校との交流学習も継続的に実施している。

地域間交流プログラムを企画するにあたり，これまでに実施してきた体験活動や交流学習を地域間交流の視点で見直し，体験活動を豊かなものにしていく方策を探った。

さらに，本校では相互訪問交流活動を原則として考え，以下の２点の仮説を設定した。

仮説１：受入活動において,自信と誇りを持って自分たちのふるさとや活動を紹介することは,自分たちのふるさとを再認識し，ふるさとを愛する心を育み，自分自身の生き方を見つめることにつながる。

仮説２：地域の環境を有効に活用した豊かな体験活動を経験した児童生徒が，異なる環境・条件の地域で受入校の子どもたちと交流することは,他者を受け入れ尊重する心を育て,コミュニケーション能力を伸ばし，豊かな社会性を育むことになる。

地域に根ざした教育を展開している学校では，地域の特性を生かした特色ある教育活動を展開している。その背景には，地域を愛し，地域を支える人間を育てて欲しいという地域の人々の願いや期待がある。学校はこのような地域の人々に支えられており，教員はそのことを意識して児童生徒を育てようとしている。そのようなとき，環境の異なる学校の児童生徒との交流は，自分の地域の特色を改めて意識する絶好の機会となる。

地域の環境を有効に活用した豊かな体験活動によって，児童生徒は自分の生活する地域を見る目をもつようになった。さらに，地域の人々の温かさを感じるようになった児童生徒は，他の地域を見る目，他の地域の人々の温かさを感じる心や他の地域の体験活動の魅力や価値を判断する力をもつようになる。そのような児童生徒が，異なる環境で交流校の子どもたちと一緒に体験活動を行うとき，自分たちの地域での活動と比較することや，自分たちが受け入れたときのことを思い出し，相手校の苦労や工夫に目が向くようになる。自らが地元の地域で経験したことがあって，他の地域での交流の楽しさがわかり，価値ある体験活動になると考える。

（2）全体の指導計画

自分の地域での体験活動を交流地域での活動と関連づけたり，豊かにすることにより，地域間交流体験を豊かな体験とすることができる。そのために，野島小・中学校で以前から行っていた「海に関わる体験活動」を見直し，その意味づけを明らかにして地域間交流活動とのつながりを持たせて年間の指導計画を組んだ。（主要活動のみ掲載）

月日（曜）	内　　容		時間	領　域	活動場所	指導者
5月 6日（木）	自然	無人島（平島）探検	２時間	総合的な学習の時間	野島，平島	地元漁師他２名
6月 7日（月）	漁業	ひらめ放流	２時間	総合的な学習の時間	野島，養殖場	漁協職員他４名
6月 15日（火）	漁業	底引き体験	２時間	総合的な学習の時間	野島周辺	地元漁師５名
7月 13日（火）	交流	柚野中との交流会	６時間	総合的な学習の時間	野島つぐみ浜	野島小中・柚野中教員
9月 16日（木）	自然	伝馬船漕ぎ	２時間	総合的な学習の時間	野島，湾内	地元漁師１名

11月6日(土)	交流	東厚小との交流会	6時間	行事	厚東小学校	受入地域教諭
3月14日(月)	自然	野島島内散策	2時間	理科・社会	野島本島全域	地域住人

年間合計：交流６日（全２６時間）　　自然に関わる活動７日（全１４時間）

2　活動の実際

（1）事前指導

はじめに総合的な学習の時間で身に付けてほしい力を説明し，さらに自分で課題を見つけることの大切さを指導した。

そこで，課題設定のために，「平島探検」「野外活動」「伝馬船漕ぎ」などのこれまで行っていた海の体験活動や昨年度の柚野中交流会で行った「筏作り」などの活動に，新たな活動を加えて交流会を盛り上げていくことはできないか，野島ならではの活動はなにか，という視点で話し合いを進めさせた。また，わからないこと，調べたいことがあったときの解決方法として，地域の人に聞くことやインターネット，書籍などを活用することについても再指導した。さらに，柚野中の人へ電話やファックスをする時の留意点も確認した。

（2）活動の展開

桟橋に出迎え，歓迎会では簡単なゲーム活動をして，交流活動を行った。

【活動１：午前】『特産素材を使った料理コンテスト』（昼食・後片付けを含む）

限られた時間で特産素材を工夫してオリジナル料理を作る。

①じゃんけんにより特産素材を入手

野島の特産素材：サザエ・アワビ・エソ・えび

柚野の特産素材：こんにゃく・長いも・みそ・しいたけ

②特産素材と各班にあらかじめ与えられた食材を使って，班で話し合いながら工夫して料理

【活動２：午後】『いかだ作り』

限られた時間に限られた材料を使い，５人で協力し，工夫していかだを作る。

①いかだ作り

審査員は『チームワーク』『いかだの工夫（形・飾りつけなど）』という観点で審査を行う。

②レース

各班で製作したいかだでレースを行う。２班ずつレースを行う。

（3）事後指導

茜島（野島）交流会で学んだことを自己評価させるとともに，交流校の友だちに体験を通しての感想を手紙として送った。さらに，当日の活動の様子をビデオ番組として編集し，地域文化祭で発表した。

また，児童生徒同士の他者評価表にも累積的な評価を追加すると同時に，自分たちのふるさとのよさについて再評価させた。

3　体験活動の実施体制

（1）学校支援委員会

学校間交流が継続的に行われ，伝統的な活動として位置づけられている。そのため交流校の委員との打ち合わせも，年間計画の段階での確認さえすれば，後は学校間の実務レベルでの打ち合わせで実施する体制が整っている。

また，本校には，従来から「茜島シーサイドスクール事業を支援する会」という組織があり，海の体験活動等を行う場合には，その講師等を引き受けていただいている。本交流会でも，安全面での監視といった裏方で多くの協力をいただいた。

（２）地域間交流プログラム開発委員会との連携

本年度当初の会合で，ビデオによる野島小・中学校の昨年度の活動状況の報告と本年度計画を委員に説明している。さらに，茜島交流会については，委員全員の半日間の視察を行った。

（３）配慮事項

海での活動が中心になることから，普通救命講習会を学校で開催し，児童生徒全員と全教職員，保護者や地域の方が受講し修了証を得ている。また，午後の活動の「筏つくり」と「レース」では，児童生徒全員にライフジャケットを着用させた。

４　体験活動の評価の工夫と指導の改善

（１）活動報告では，よかった点や使えた言葉等を評価カードに記入し，教室に掲示する。評価カードは，「使えた言葉」「発表の仕方」「書き方」「進め方」「思いやり」という観点で色分けする。（交流会実施まで）

（２）保護者・関係者に，活動中の児童生徒への一言メッセージを付箋紙に書いてもらい，各児童生徒に渡す。（交流会当日）

（３）当日の活動の様子を観察し，終了後，「コミュニケーション能力」「活動への意欲」「協働の態度」「思いやりの態度や言動」等の観点で自由記述する。（事後評価）

５　地域間交流の成果と課題

継続的に行われてきた学校間交流を，地域間交流という視点で再点検し，従来行ってきた交流地域の「自然やもの」中心の交流を，昨年度から「人」中心の活動へと計画を変更したことで，目標の明確化ができた。さらに，本活動を通し児童生徒が地域に出かけることが増し，新たな協力者が開発できた。本校児童生徒がもつ共通の課題でもあるコミュニケーション能力の育成については，個々により差があるものの，自分なりに他者との意思の疎通を積極的に図ろうとする姿が見られ，大きな成果を得た。また，児童生徒が自分たちのふるさとの自然・人・ものを再発見する機会がたくさんできたことも大きな成果である。

課題としては，学校間交流活動を進める場合，自然を活用した活動があるため，天候を考慮しないと計画が立てられないことがある。さらに，学校間交流を進める場合，人と人との交流を中心に考えると，規模の同じ学校との交流が必要になる。しかし，近年の少子化，過疎化，市町村合併等々の影響で，本校でも交流校の選定が難しくなってきている。来年度は，本校が交流校に出向く番である。本年度の活動を終えた時点で，交流校の児童生徒は来年度の交流の計画を考え始めているようである。最後に，茜島交流会を視察されたプログラム開発委員の感想を掲載する。「私が参観させていただいて一番の気づきは，私自身が青年会議所活動の中で推進しております『PTCA（PTA に「コミュニティ（地域社会）」を加えたもの）』がこの場にしっかりとあったことです。へき地等イメージ的には田舎というニュアンスを与える言葉ですが，戦後日本の一番必要な部分を捨ててしまった地域学習力，地域教育力を本交流プログラムで見ることができました。」

【 中学校・地域間交流に関わる体験活動 】

自然とのふれあいを通して生きる力の育成を

大阪府大東(だいとう)市立大東(だいとう)中学校

学 校 の 概 要

① 学校規模

○ 学級数：１３学級（内養護学級１学級）

○ 生徒数：４０６人

○ 教職員数：２６人

○ 活動の対象学年：２年生・１３５人

② 体験活動の観点などからみた学校環境

○大東市は大阪平野の東部に位置し、高度成長期に急速に宅地化した地域である。学校は、公営集合住宅の中にあり、自然環境には恵まれていない。

○生活指導が困難な時期があったが、関係諸機関との連携や教職員の努力の中で克服しつつある。

③ 連絡先

○ 〒574-0034
大阪府大東市朋来１丁目３０番１号

○ 電　話：０７２－８７２－５５００

○ ＦＡＸ：０７２－８７２－５５０１

○ ホームページ：
http://ed.city.daito.osaka.jp/daito-jhs/

○電子メール：
daito-jhs@ed.city.osaka.jp

体 験 活 動 の 概 要

① 活動のねらい

○生徒が生活する住環境は、自然環境に恵まれていないので、学校が意識的に自然体験活動を推進しないと、自然とふれあう機会は少ない。

○滋賀県のマキノ町は自然豊かな地域である。地域間交流を通して、生徒が豊かな自然体験をし、そのことを通して豊かな人間性や社会性を育むことを目指す。

○地域間交流として、マキノ町立マキノ中学校マキノ町観光協会、マキノ高原民宿組合との交流を推進する。

②活動内容と教育課程上の位置付け

○自然体験活動

総合的な時間	２３時間
理科	２時間
社会科	１時間
美術科	１時間

○農業体験

技術家庭科	２２時間

○職業体験

総合的な時間	１２時間

1　活動に関する学校の全体計画

○　活動のねらい

平成１５年度当初、滋賀県近江八幡市との地域間交流を計画したが変更を余儀なくされ、秋からはマキノ町での交流活動を進めてきた。マキノ町立マキノ中学校の生徒との交流も深め、現地からもらって帰ったコスモスやひまわりの種を育て、自分の学校の環境改善に役立たせた。また、学校近隣の休耕田を借り受けタマネギの栽培に取り組んだ。林間学校を中心に豊かな自然環境のマキノ町での体験活動を推進し、生徒に豊かな人間性と社会性を身につけることをねらいとした。

○　全体の指導計画

・活動の名称　　自然とのふれあいを通して生きる力の育成を

・実施学年　　第２学年

・活動内容、教育課程上の位置付け、単位時間等

	活　動　内　容	教育課程上の位置付け・時間
「交流花壇」作り	前年度の交流でマキノ中学校よりもらったひまわりとコスモスの種を植える。	総合的な学習　　５時間
たまねぎの収穫	前年度11月に植え付けた近隣の休耕田のたまねぎの収穫。	総合的な学習　　３時間
バケツ稲栽培	ＪＡと連絡を取り校庭でバケツ稲の栽培に取り組む。	技術家庭科　　２２時間
林間学校	登山・農業体験	総合的な学習　　１５時間
	マキノ町の産業について	社会　　１時間
	里山の自然について メダカ池作成と飼育	理科　　２時間
	杉細工	美術　　1時間
職業体験	約４０カ所の事業所で職業体験	総合的な学習　　１２時間
車いす・アイマスク体験	校内において、全員が模擬体験	総合的な学習　　１時間

２　活動の実際

○　事前指導

・　平成１５年１１月８日（土）　事前学習として各クラスの班の代表３３名と校長・教諭でマキノ町訪問。マキノ中学校では生徒との交流と共に学校園でコスモスの種を採集し、ひまわりの種と共におみやげとしてもらって帰った。後日、「交流花壇」として大東中学校で栽培を始めることとなった。その後、マキノ町観光協

会、マキノ高原民宿組合の方々と顔合わせとあいさつを行い農業体験の第１歩としてキャベツの取り入れ体験を行った。

・平成１５年１１月１２日（水）、学校近隣の休耕田を借り、タマネギの植え付けを行った。

○　活動の展開

月	日	活　動　内　容
4	２１	豊かな体験活動推進委員会　発足 「交流花壇」「メダカ池」「バケツ稲」「タマネギ栽培」委員会 林間学校推進委員会 各学級正副委員長含め３２名
	３０	花壇・池作り作業 メダカとホタルの飼育についての学習会 講師　学校協議会委員 メダカと川砂をもらう
5	１０	稲のもみを水に浸す
	１４	バケツの土入れ・苗の移し替え
	２８	タマネギの収穫とシチュー作り
6	１４ ～ １６	林間学校　（クラスごと４件の民宿に分宿） 赤坂山登山、ホタル鑑賞、星の観察、キャンプファイアー 農業体験　田植え・田圃の草取り、大根とソラマメ取り入れ リンゴの摘果、サクランボとブルーベリー摘み 保護者あてのはがき記入と投函 マキノ中学校との交流　ビデオ交換・ドッジボール大会 マキノ中学校よりソバの種をもらう

○　事後指導

・林間学校後　　班新聞「林間学校版」特集作成

・民宿へのお礼の手紙を送付

・８月１６日　　登校日にプールでマキノ産のスイカ
　　割り大会
・９月１３日　　マキノ町へ稲刈り

３　体験活動の実施体制

○　学校支援委員会の体制

・　学校には、豊かな体験活動推進委員会を設置し、PTAの支援も受けた。また、学校協議会が豊かな体験活動支援委員会を兼ねることとし様々な支援を受けた。

・　一方、マキノ町では、マキノ町立マキノ中学校、マキノ町観光協会、マキノ高原民宿組合の協力を得た。

・大東中学校区には、地域的な教育力再生を目指す地域教育協議会（幼稚園・小学校・本校・高等学校、校区各自治区、子ども会、青少年指導委員会、民生児童委員会その他から構成）があり様々な活動を行っている。そのメイン活動に大東中学校区約１０００人が集う「ふれあいまつり」があり、そこの一角に観光協会と民宿組合による産地直送の野菜販売の模擬店を設置して好評を得た。また、ＰＴＡ２年学年委員会の協力も得て「そばうち体験活動」を行った。今後の地域間交流継続の糸口になったと考える。

４　体験活動の評価の工夫と指導の改善

・教育課程上の位置付けに基づき、技術家庭科、社会科、理科、美術科の評価基準に照らして評価をする。豊かな体験活動全体として各活動への自己評価表を書かせると共に、感想文・班新聞作り・民宿へのお礼の手紙作り・保護者への手紙作りを通して、自らを振り返り、評価し、自らの課題を見つけ出す自己評価を行った。

５　活動の成果と課題

・日常生活では接することのない自然とのふれあい、里山での生活体験を通して、今まで育ち生活してきた地域とは違う環境について学ぶことが出来た。また、宿泊を含めた集団活動を通して自然との関わりを体験できたことも貴重である。この経験が、日常生活のある学校、家庭生活、地域への再認識につながったと考える。

また、集団活動を通した取組の中で仲間を思いやる気持ちも発揮され、不登校で学校に来ることのなかった生徒が、級友の働きかけの中で結果的に登校するようになったのも成果の一つである。生徒全体の表情が明るくなり、教師との関係も取組以前と比較して良好に変化したように感じる。学習規律の確立などまだまだ課題は多く残るが、体験活動の成果が今後の生徒の学校生活に活かされるものと確信する。

さらに、地域や支援団体の関係では大東中学校区地域教育協議会等とマキノ町観光協会、民宿組合などの地域ぐるみの交流が可能な関係が構築できたと考える。

【高等学校・職場・職業・就業に関わる体験活動】

「勤労観・職業観の育成」を重視した体験活動

青森県立十和田西（とわだにし）高等学校

学校の概要

① 学校規模
- ○ 学級数：６学級
- ○ 生徒数：２１０人
- ○ 教職員数：２７人
- ○ 活動の対象学年：観光科３学年３７人

② 体験活動の観点などからみた学校環境
- ○ 各学年、普通科１クラス（大学進学）と観光科１クラス（資格取得）の２クラスからなる小規模校である。
- ○ 本校の位置する十和田湖町にあっては十和田八幡平国立公園をはじめとする自然的観光資源を核として形成されてきた観光関連産業が発達している。
- ○ 近年の社会経済情勢にともないこの地区の観光関連産業からの求人も激減している。

③ 連絡先
- ○ 〒０３４－０３０２
  青森県上北郡十和田湖町大字沢田字下洗５３番地３号
- ○ 電　話：０１７６－７３－２９２９
- ○ ＦＡＸ：０１７６－７３－２３２３
- ○ ホームページ
  :http://www.jomon.ne.jp/~tonishi1/
- ○ 電子メール
  :towadanishi-h@asn.ed.jp

体験活動の概要

① 活動のねらい

新設事項
- ○ 職業への適性や将来設計について考える機会を与え、職業意識の育成を促進
- ○ 交流地域と地元の文化や産業の差異を体得し、広い視野で現在の自分と実社会との関係について認識を深める

継続事項
- ○ 学習意欲の喚起と社会や経済の変化に主体的に対応できる基本的な資質の育成
- ○ 社会の進展に対応できる実践的なコミュニケーション能力の重視

② 活動内容と教育課程上の位置付け
（単位時間数・日数）
- ○ 上級救命講習会
  課題研究（４時間×２日）
- ○ 体験型観光施設スタッフ体験
  「伝統工芸・南部裂織り」
  課題研究（２時間×２グループ）
- ○ シティホテル・お土産店スタッフ体験
  課題研究（１泊２日）
- ○ 秋田県小坂町での観光施設業務体験
  小坂高等学校と合同でのイベント参加
  課題研究（１日）（４時間）
- ○ バスガイド・添乗業務研修体験
  課題研究（１日）

１　活動に関する学校の全体計画

○　活動のねらい

近年、本校の就職希望者に対して、社会の国際化・情報化・サービス化等の急速な進展と、産業構造や求人職種の形態の変化に十分対応できているとは言えない面もあった。この社会情勢の大きな変化の中においても、特に観光科で学ぶ生徒が将来に対する明確な展望を持ち、地元の観光産業及び地域振興への貢献を目指す人材の育成にどのように取り組むべきかが課題としてあげられた。

前年度から、地元（十和田湖町・十和田市）、八戸市、秋田県小坂町の３地域での体験活動を継続的に実施し、それぞれの地域の文化や産業の特徴等を比較検討させる「職場･職業･就業に関わる体験活動」を中心に学習を進めた。その結果、生徒の学習する姿は行動から活動へと徐々に変化が見られていた。生徒はこれまでの活動により、感動する機会が増えたことで確実に変化し成長した。

しかし、前年度実施後の課題として、①職業選択のきっかけとなる生徒が少ない。②地元のみならず広い視野で社会と自分との関係の認識が希薄である。の２つがあげられる。

そこで今年度は、昨年度からの主な活動のねらいに加え、①職業への適性や将来設計について考える機会を与え、職業意識の育成を促進する。②交流地域と地元との文化や産業等の差異を体得し、広い視野で現在の自分と実社会との関係について認識を深める。の２つを補足することとした。

この２つのねらいにも重点を置くことによって、更に自分と社会との関わりに対する理解と認識が深まり、自己の在り方・生き方について考え、主体的な職業選択の能力や高い職業意識の育成が促進されると考えた。また、生徒は社会人と接する機会が増えることで、幅広い世代とのコミュニケーションが必要となり、この能力の重要性を理解することも期待し、以下の指導計画を立てた。

○　全体の指導計画

対象学年：観光科３学年（３７名）

教育課程上の位置付け：課題研究３年次２単位（総合的な学習の時間に代替できる科目）

学習内容：産業現場等における実習に関連付けた体験活動

「体験活動の名称」時期・活動場所 活　動　内　容	期間・日数 単位時間数
「上級救命講習会」　５月上旬・学校内 ・昨年実施した普通救命講習を更に発展させた学習として、突然の事故等に遭遇した場合、救急車が到着するまでの応急処置を学ぶ。このことで生命の大切さを認識し、ボランティアや職業体験等の万一の場合に備える。	４時間 × ２日
「体験型観光施設スタッフ体験」　７月中旬・十和田市の道の駅 ・『道の駅・匠工房』で南部裂織りの指導スタッフを模擬的に体験し、指導方法とお客とのコミュニケーションの取り方を学習するとともに、郷土の伝統工芸再興をはかる取り組みを再確認する。	２時間 × ２グループ
「シティホテル業務体験・おみやげ品店スタッフ体験」 ８月下旬・シティホテル、物産販売センター ・八戸市のシティホテルで、宿泊や接客サービス等の実務に就いて、総合的に体験するとともに、八戸地域の観光施設の現状とその施設での業務を学習する。	１泊２日
「秋田県小坂町での観光施設業務体験・小坂高等学校と合同でのイベント参加」 ９月上旬・康楽館周辺、交流センターセパーム ・小坂町の観光資源や施設等の現状を学び、その施設内での業務を体験するとともに、本校と同じ観光科目を学習している生徒と合同でイベントに取り組み参加することで､青森県と秋田県との観光事業に関わる連携した取り組みを学習する。	１日 ４時間
「バスガイド・添乗業務研修体験」　９月中旬・種差海岸 ・バスガイドと添乗業務の内容を取り入れ、実際に八戸市の観光コースを巡りながら、バスの車内・散策コースの双方で実務的な研修体験をするとともに、県立自然公園種差海岸周辺の観光資源について学習する。	１日

２　活動の実際

○　事前指導

各体験学習の実施にあたっては、観光科でこれまでも計画的に実施してきた体験活動現場からの特別非常勤講師を活用した授業を事前指導の時間とするとともに、前年度実施の体験学習からの発展的な活動であることを確認させた。

また、教材等で不足している部分は、科目「観光ビジネス」の授業でパンフレットやインターネットを利用して最新の正確な情報を収集し、自分なりにまとめさせる準備時間として補充した。このことは自ら知識や情報を検索し、正しい内容を取捨選択する能力を育てることにつながった。

○　活動の展開（一例）

体験活動の名称	「バスガイド・添乗業務研修体験」		
活動の場所	種差海岸（バス車中含む）	指導者	バスガイド・旅行代理店職員
活動のねらい	八戸地域の観光資源を学ぶとともに、実践を通して職業意識の育成を促進する		

学習活動	指導上の留意点	備考
1　昨年度の実施内容を確認(事前学習) 2　添乗業務・バスガイドの実際 3　種差海岸周辺の観光名所を散策し、実務研修を体験 5　他の生徒の感想から、自分の考えと比較検討（事後学習）	・昨年の新人研修体験を確認 ・挨拶から日程等全般の確認 ・事前調査の検証と危険箇所の確認 ・学習活動の位置づけに沿って自己評価と相互評価の機会	・昨年の反省事項 ・指導者助言 ・安全性の確保と緊急連絡網 ・メモの必要性と評価方法の理解

○　事後指導

自ら積極的に体験活動に参加できたか、学習活動の位置づけに沿って活動できたかなど必ず自己評価させるとともに、生徒間での相互評価も設定した。その中から今までの自分と比較し、自分自身の成長を確認することが次回に向けてのモチベーションの高揚になると考えた。

３　体験活動の実施体制

○　学校としての推進体制

・現在ある分掌の観光教育推進部を中心に、対象となる学級担任を交えて企画・運営をした。

・実施方法　　観光教育推進部での受入先確保と候補の選定　（前年度まで）
　　担当者の計画・立案と推進部での検討　（１ヶ月～３週間前）
　　事前学習　（３週間前～当日）
　　自己評価と体験報告・受入先との意見交換　（当日～２週間以内）

○　学校支援委員会の体制

学校支援委員会には、主な活動地域から３名を学校支援委員として招いた。本委員会は必要に応じて委員を招集し会議を持ち、体験活動の内容・実施場所等について検討し、支援活動をすることとした。体験活動後は新たな課題等に対して意見交換を行い、改善のアドバイスをする。

学校支援委員一覧

勤務先・職名	備考	勤務先・職名	備考
十和田西高等学校・校長	代表者	十和田湖町役場・観光推進課長	地元
十和田西高等学校・教諭	主担当者	ホテル総支配人	秋田県
十和田西高等学校・教諭	副担当者	バス会社管理部次長	八戸市

○　配慮事項等

今年度実施した体験活動については、特に危険を伴う場所での活動がなかったと思われたが万一の場合に備え、活動の最初に「上級救命講習会」を実施し、安全確保の重要性を認識させた。

また、全生徒が等しく活動できるように次の３点にも考慮した。

①学校行事とのバランスや部活動の大会等を考え、適宜日程の調整をする。

②体験活動等にかかる生徒の自己負担を極力抑えるために創意工夫をする。

③就職・進学の受験にかからぬよう前期（４月～９月）の期間に実施する。

４　体験活動の評価の工夫と指導の改善

○　評価とその工夫

評価の観点としては、次の２点を中心に実施した。

①「体験活動の設定目標」と「自己の設定目標」にどれだけ到達したかの成果を確認し、目標への到達度を自己評価できるように努めた。

②生徒のまとめ（感想・反省等）が曖昧な自己評価にならないよう「ポートフォリオ」を作成させ、前期の体験学習での成果と成長を表現させた。また、それを利用してのプレゼンティーションにより、生徒間での相互評価ができるようにした。

○　指導の改善

当初、計画した主な活動のねらいから外れがちの場面もあったため、次の２点を改善した。

①体験学習した３地域での文化や産業等の違いを比較検討する時間を設定し指導した。

②それぞれの体験活動が職業選択のための探求となり、自我の形成の一助となるよう考察する時間を設定し指導した。

５　活動の成果と課題

今回この活動を実施しているクラスは、真面目だが今までの観光科の生徒と比べても物静かで自分の考えを人前で発言することを苦手とする生徒が多く、１年次から消極的な傾向があると見られがちであった。これまでも観光科では、体験学習や社会人を講師として迎えての授業は実施していたが、この「豊かな体験活動推進事業（地域間交流）」を機会に２年間継続して、集中的に活動する時間を設けることができた。

その結果として、生徒には活動グループの中でリーダーシップを発揮している者、新たに進路目標に向けての資格取得をめざし主体的に活動する者など積極的な面も増えてきた。生徒の感想の中にも「自分たちで調べ学習したことを実際に現場で体験できたことが、３年間観光科で学んで良かったところである」と達成感や充実感を表し、職業観の意識改革につながっている点が大きな成果としてあげられる。また、このクラスの進路志望調査（９月３０日現在）で見れば、３７名中、進学１８名、就職１９名（内公務員６名）で、ほぼ例年並の割合である。進路先内定（１０月１２日現在）の結果は、公務員を除く就職１３名中９名（内３名が県外）が確定しているところである。

しかし、この地域間交流では地元のみならず広い視野で社会と自分との関係を知る時間として、現在の自分自身のスキルを確認できる活動に重点を置く必要も感じている。現状では、まだ職業選択のきっかけになったと感じる生徒も少ない。更に効率良く効果的な指導をするために、３年間通しての継続的・発展的な体験活動となる計画を立てるため、全ての特別授業等を再度検討する必要も生じているなど解決しなければならない課題も残る。